



## 日・中の民間芸能の比較 伝統の異なる変遷

岳 永逸（北京師範大学民俗学与文化人類学研究所教員）

### はじめに

2005年7月15日～28日、筆者は神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により、海外若手研究員として日本で訪問研究を行った。

私の研究は主に民間芸人、民間信仰及び民俗誌、特に近現代の都市における街頭芸人と現代の華北における村の祭りに関するものである。中国社会の現代化プロセスと経済発展に伴い、これらは主に食品産業経済から発生し、農耕文明と一体となった民俗現象に変化をもたらした。例えば、20世紀前半の北京天橋、天津三不管（訳注：誰も管理していないことからこう呼ばれた）南京孔子廟、開封相国寺などといった都市における「雑吧地」（様々な職業の人が集まる場所）は、完全に姿を消した。もし、今日まで残っていたとしても、かつて「雑吧地」で行われた露天芸能はすでに舞台やカメラによって異化してしまっただろう。同じ空間で観衆と向き合う相互活動や交流、そして本能的に生み出され、芸人のインスピレーションをかき立てる即興と民間芸能が有した素朴さ、野性味そして生命力は失われてしまった。<sup>(1)</sup> 広大な農村において、かつてはこぞって表現され、演じられた民間文化の神仏を祭ることを原点及び核心とする祭祀にも、主だった言葉の統一化や目先の経済利益という動きの下で変化が生じている。農村社会には人々の需要を満足させ、心理的に人々の生存危機を解決するという本土信仰は未だに主だった言葉によって愚昧や迷信、非合理的だと決め付けられ非難されている。<sup>(2)</sup>

### 中国の民間文化

これらの現状と矛盾するのは、経済力の成長に伴い、今日、文化の保護と発展に関心を抱く余裕がでてきた政府が、まず保護し、発展させたのは、政府の意志を代表するそれぞれの人が決して完全には認知していない「民間文化」だった。これは今日の政府の発表に頻りに表れる民間文化遺産を再び民間文化自体から遠ざけ、美しい表看板となった。個人或いは団体の参加、政府主導によって申請された民間文化遺産運動も事実上は名利を争奪し、私利をむさぼる目隠しとなった。このような状況下において、かつて都市の「雑吧地」で行われた演技やなお健在な老芸人、農村における龍、伏羲、女媧などと現代国家の神話的記号をスムーズに結びつけた祭りは、人々

に尊重されるか、そうでなければ比較的豊かな存在背景を持った。

物質文明が高度に発達した日本と比較すると、中国は依然、地域発展が不均衡な発展途上国である。中国に既存する研究に鑑みて、私は中国と多くの文化的淵源を共にする日本の民俗文化の現状及び伝承者のアイデンティティに関心を抱いた。そのため、私は今回、主に日本の都市と農村における集団性祭祀活動の現状、落語などの伝統的民間芸能及び芸人の知識伝承と認知をテーマに研究を行った。

### 日本の祭祀と民間芸能

今回の訪問研究では主に日本の昨今の集団性祭祀活動について観察を行った。私は、7月20日、21日、27日、静岡県熱海市網代の阿治古神社例大祭、埼玉県熊谷市団扇祭り、神奈川県真鶴町の貴船祭りを参観した。これらの祭祀は、程度は異なるが一様に無形文化財である。これらの祭祀活動は現地の人を総動員して行われた。政治要人、財団、個人は次々と寄付をし、警察は秩序を守り、中壮年が神輿を担ぎ、小中学生は笛や太鼓を持ち、あるいは大人たちの真似をし、神輿を引っ張り、街を練り歩いた。団扇祭りでは、発達した科学技術、物質的生活と伝統的な祭祀との間に対立を感じることはなかった。「見者有縁、人人参与」（見たものには縁があり、みなに参加する）という集団の協力精神を感じ、文化的伝統を有するという誇りと喜び、そして一糸乱れぬ演技を見た。文化は文化である。「文化搭台、経済唱戲」（文化が台を築き、経済が芝居をする）という文化をまるで経済の随従や召使であるかのように軽視する政策にその力を振るう余地はない。文化的伝統としての祭祀自体は社会的尊重と保護を受けている。

中国の単口相声に似た落語の伝承は比較的良好な保護を受けている。これは業界内に前座、二つ目、真打という芸能の師伝メカニズムの保存であるばかりか、政府が次第に保護に乗り出している中で、今日の落語家は独立した思考精神と「文化的自覚」を持っており、技巧に優れただけの匠ではないということにも表れている。滞在中、神奈川大学COE研究員・RAの宮本大輔氏協力の下、私は落語家桂歌助氏に、また同様に、同大学山口建治教授と宮本氏の協力の下、大道芸人でありその研究者であ

る上島敏昭氏にインタビューする機会に恵まれた。その際、大学卒業後、落語を生涯の職業として選んだ桂歌助氏は次のように語った。「落語は多くの挫折を経験するだろう。だが、もしこれが消えてしまえば、日本ももう存在しない。落語は日本国民が深く愛するものなのだ。」

おわりに

一衣帯水の両国において、伝統文化はなぜこのように異なった境遇にあるのだろうか。まさかわれわれの民間文化が多すぎ、勝手に壊すことができるものだとでもいうのか。「文化的自覚」が実を伴わないスローガンとならないことを願う。

(岳永逸氏は、2005年7月15日～7月28日訪問研究員として来日。)

参考文献

- (1) 岳永逸,『脱離と融入:近代都市社会街頭芸人身分の建構以北京天橋街頭芸人為例』,『民俗曲芸』143(2003.12):202-272;『自我的放逐 天橋街頭芸人の生成と系譜』,北京:北京師範大学出版社。
- (2) 岳永逸,『廟会の生産:対当代河北趙県梨区廟会の田野考察』,北京師範大学博士学位論文,2004;『鄉村廟会の多重叙事 対華北範壯龍牌会の民俗学主義研究』,『民俗曲芸』147(2005.3):101-160;『伝説、廟会与地方社会的互構 対河北C村娘娘廟会の民俗誌研究』,『思想戦線』2005(3):95-102;『田野逐夢 走在華北鄉村廟会現場』,南寧:広西人民出版社。

写真1



昨今、華北鄉村廟会において祭られる「大神」毛沢東

写真2



静岡県熱海市網代で催された阿古古神社例大祭

写真3



新宿末広亭では多くの落語ファンたちが列をなしていた

写真4



自分の手拭いを広げる真打桂歌助氏